

『古事記』
に学ぶ
やまところ



これからの日本を
生きるための
「新しい生き方」

中村 雄介

Manabeat

電子書籍化シリーズ

第 3 弾

はじめに

「太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない。
太陽が昇るから夜が明けるのだ」

皆さまはじめまして。

私は中村雄介（なかむらゆうすけ）と申します。

上記のフレーズは

「教育界の国宝」

と呼ばれた東井義雄さんの言葉です。

私の大好きなフレーズで

私の名刺の裏には

「人生を照らす言葉」

として記載しております。

太陽といえば...

子どもの頃に

「嘘をついても『お天道様』が見てるよ！」

と怒られることがありませんでしたか？

転んだ時に

「痛い痛い飛んでけ〜」

と言われませんでしたか？

そして

誰の？...かはよくわからないけど

「おかげさまで...」

ということを何の抵抗もなく言っていないですか？

そんな日本人の「心の原点」は

今年（2012年）編さん1300年になる

「古事記」に込められています。

その古事記を活用して

これから

「『古事記』に学ぶやまところ」

という

「心を育て形で表す」

お勉強を皆さまと一緒に行っていきたいと思います。

遅ればせながら自己紹介させていただきます。

私は中村雄介と申します。

かれこれ15年ほど「教育」の仕事に関わらせて頂いております。

2011年の9月に独立し

株式会社マナビートという小さな会社を経営しております。

<http://www.manabeat.jp/>

企業と医療機関の管理部門を専門にして

「面接」のやり方や「いい人財」を見分ける方法をアドバイスさせて頂きながら

ともに管理部門の社員さまと成長できることに

日々喜びを感じながら仕事をさせて頂いております。

これから始める

「マナビート赤熱教室」

はいわゆる「哲学」の話になります。

皆さんどうですか？「哲学」...と聞くとどんなイメージをお持ちでしょうか？

「難しそう？」

「大学の授業であったような、でも難しそう？」

「ソクラテスとかプラトン?...とか？」

はい、そうですよね。

難しそうとか、とっつきにくそうとか、だいたいそんなイメージになりますよね？

私も初めはそうでした。

でも「哲学」ってとても簡単なんですね。

私は「哲学」って「じゃんけん」だと思っています。

そうです、「グー」「チョキ」「パー」の「じゃんけん」です。

じゃんけんの「グー」って...なんの何を表していましたか？

「石ですね」

では「チョキ」は何でしたか？

「はさみですね」

では「パー」は何でしたか？

「紙ですね。」

それで

「石」は「はさみ」では切れない

「紙」は「はさみ」で切られる

「石」は「紙」に包まれてしまう

という「ルール」ですよ？

私は以前からこの「ルール」がおかしい

と思っけていまして、

「パー最強説」というものを唱えています。

「石」を「紙」で包めるように
「はさみ」も「紙」で包める...と思うんですよね？
そう思いませんか？
このように世の中にある「常識」や「ルール」というものに対して
「これってどうなんだろう？」
...と思うことが「哲学」なんですね。

「じゃんけん」ついでにもう一つ！
「じゃんけんの必勝法」
...というものがあるのですが、皆さんご存じですか？

...
そうです！相手が出した後に出すんです。
いわゆる「後出し（あとだし）！」ですね。
こうすると必ず勝てます！100%です。
でも...それは
「人としてはどうかな？」
...と思いますよね？
このように「常識」や「ルール」がどうかな？と思うことと
それが「人として正しいか？どうか？」を考えること
これが「哲学」なんですね。
これから皆さんで『古事記』を題材として
一緒に「哲学」していきましょうね。

どうぞ最後まで楽しんで頂けると幸いです。

【収録内容】

1. 『古事記（こじき）』って何？
2. 『稲羽（いなば）の白うさぎ』について
～その1～
3. 『稲羽（いなば）の白うさぎ』について
～その2～
4. 『稲羽（いなば）の白うさぎ』について
～その3～
5. 『やまところ』について
6. まとめ

『古事記（こじき）』って何？

「スサノオノミコトのヤマタノオロチ退治」

「ヤマトタケル（ノミコト）の東方遠征」

「稲羽（いなば）の白うさぎ」

...どれかは知っている？

でしょうか？？

この物語が書かれている日本で一番古い歴史書が

『古事記（こじき）』

なんです。

『古事記』は天武天皇の命令によって

稗田阿礼（ひえだのあれ）が「暗唱」して「読み聞かせ」していた

「古い伝承神話」を

太安万侶（おおのやすまろ）が書き記して

712年にまとめて完成された全三巻の歴史書です。

昔々の人々は「日本の成り立ち」や

「昔の人の生活スタイル」などについて

「むかしむかし...」で始まる

「桃太郎」や「浦島太郎」のお話のように

父母からその子へ

そしてまたその子から子へ

と「お話」によって語り継いできたものなんです。

それらをきちんと文章にまとめたものが『古事記』なんです。

そのため『古事記』を読むと

「日本がどのようにしてできたか？」

「昔の人が大切にしていた価値観」

こういったものを昔の日本人がどのように考えていたのか？

がわかるのです。

しかし！

一点だけ残念なことです...

『古事記』そのものは「昔のことば」で書かれているため
多少今の「ことば」で理解しようとする
と理解しづらい部分があります。

でも

そこを含めたとしても

世界でも他にはない

2000年以上も続いているこの「日本」について

「日本人」とはいったいどんな民族で

2000年もの間

どんなことを大切に生きて？

何を守り続けてきたのか？

その正体である

「やまところ」

がたくさん散りばめられているのが

この『古事記』であり

『古事記』を読むことの大きな魅力なのです！

『稲羽（いなば）の白うさぎ』について ～その1～

実際の『古事記』におさめられている

「稲羽（いなば）の白うさぎ」

のお話をこれから3回に分けてお伝えしていきますね。

昔むかし...

隠岐（おき）の島に一匹のうさぎさんが生まれました。

このうさぎさんを

「稲羽（いなば）の白うさぎ」

と呼びます。

このうさぎさんが

ある日海岸に行ってみたところ

海の向こうにある本州をはじめて見ました。

このせま～い隠岐（おき）の島に比べると

すごく大きくて山も川も野原もたくさんありそうな

その本州に

うさぎさんはどうしても行きたくて行きたくてたまらなくなりました。

その時たまたま一匹のワニ（サメ？）がうさぎさんの前に現れました。

うさぎさんはそれを見て

「あなたの背中に乗せて向こうの陸地に運んでくれませんか？」

...と頼もうと思いましたが

そこでじっと何かを考えて

ハッと思いつきこう言いました。

「ワニさん、
あなたのワニ仲間の数とわたしのうさぎ仲間の数、
どちらが多いか比べてみませんか??」

...

今回のお話はここまでです。

皆さまが
もしこのうさぎさんだった場合

「本州に行きたい」

とっていた時に
たまたま現れたワニ（サメ?）さんに対して

「どんな話をしますか??」

「どんな誘い掛けをして本州に連れて行ってもらうと思いますか??」

いろいろと思いをめぐらせてみて下さいね。

実際の『古事記』におさめられている

「稲羽（いなば）の白うさぎ」

のお話を2回目としてお伝えしていきますね。

本州にどうしても渡りたいうさぎさんがワニ（サメ？）さんに

「ワニさん、
あなたのワニ仲間の数とわたしのうさぎ仲間の数、
どちらが多いか比べてみませんか??」

と誘い掛けた翌日

ワニさんはワニ仲間を全員海に並べました。

うさぎさんは

「ではわたしが背中に乗って数をかぞえていきますね！」

...と言ってワニの背中に乗って数を数えながら
本州のほうに近づいて行きました。

あまりにもワニの数が多く
数えるのに時間がかかった上に
その日のお天気もポカポカと暖かかったので
ワニは最後の方にはウトウトとして
しまいには眠ってしまいました。

「いよいよ本州に渡るぞ」

となった時にうさぎさんはクルッと後ろを振り返って言います。

「ワニのバカどもめ！」

数を数えるなんてウソなんだよ。
わたしがだましてやったんだ！
骨折り損のくたびれもうけとはお前たちのことだよ。
ざまあみろ！！」

と叫びました。

それを聞いたワニさんは
ハッと目を覚まし
その状況に気づき
すごい勢いで怒りました。

そしてパカッと大きな口を開け
そのするどい歯でうさぎさんをガブリとくわえました。

...

今回のお話はここまでです。

はい！今回も...
ここで皆さまに質問です。

「どうしてうさぎさんは最後に
『ワニのバカどもめ！...』と叫んでしまったんでしょう??」

それさえ言わなければきっと

「本州に行きたい」

という夢がすんなりと叶っていましたよね？

「皆さまはどのように考えますか？」

今回も
いろいろと思いをめぐらせてみて下さいね。

実際の『古事記』におさめられている

「稲羽（いなば）の白うさぎ」

のお話を3回目としてお伝えしていきますね。

本州に渡れるぞという直前にうさぎさんがワニ（サメ？）さんに

「ワニのバカどもめ！
数を数えるなんてウソなんだよ。
わたしがだましてやったんだ！
骨折り損のくたびれもうけとはお前たちのことだよ。
ざまあみろ！！」

と叫んだためにそれまで眠っていたワニさんが目を覚まし
とても怒ったワニさんは
そのするどい歯でうさぎさんをガブリとくわえました。

ワニさんはワニ仲間に相談しました。

「こんなにわたしたちをだました上に
さんざんコケにしてくれたこのうさぎ！
いったいどうしてくれようか？」

するとワニの大將が

「とても憎いやつだ！
...でもよく見るとまだ若いうさぎだ。
殺してしまうのではなく
皮をすっかりむいて赤裸にして痛い目に合せてやろう」

と言ってワニ仲間でうさぎさんを赤裸にして
陸の上に放り出しました。

あまりの痛さに気絶してしまっていたうさぎさんは
ようやく目を覚まします。

あまりの痛さにワニさんに対して

「痛いよ～。痛いじゃないか！
ワニの奴め！
いくらなんでもこんな目にあわさなくてもいいじゃないか！」

と恨みごとを言いながら泣き続けました。

でも...

いくら恨みごとを言っても
泣き続けても
むかれた皮は元に戻りませんし
痛みはますばかりです。

ずいぶんその状態が続いた時に
うさぎさんはそこでハッと気づきました。

「たしかに自分が悪かった。
ワニさんにお礼を言うどころか
ののしってしまったのだから
自分が悪かったんだ。

でも...

なぜワニさんは自分を殺さずに
赤裸にただけで済ませたんだろう？」

そして続けてようやく気づきました。

「きっとワニさんは自分に反省させようとして
こうしたんだ。

本当にごめんなさい。

もうこれからは人様に迷惑をかけることはしません。

バカ呼ばわりもしません。

必ず立派なうさぎになってワニさんの好意にむくいます！」

こう強く思い

「どうぞ神様、
わたしの身体を元通りにして下さい！」

...と祈っておりました。

...

今回のお話はここまでです。

はい！今回も...
ここで皆さまに質問です。

「このワニさんのように人にだまされたような経験がありますか？」

もしあれば
その時どんな気持ちでしたか？
その後どうなりましたか？

「だます」ことも
「だまされる」ことも
ないに越したことはありませんよね？

本日も
いろいろと思いをめぐらせてみて下さいね。

『やまところ』について

これまで4回に渡って

『古事記』に学ぶやまところ
と題してお伝えしてきました。

最終回の今回は...
ではその

『やまところ』

とはいったい何だろう？
ということについてお話しさせていただきます。

ずばり！
ひとことで言うなら...

「問題解決能力」

のことだと私は捉えています。

これまでの

「稲羽（いなば）の白うさぎ」

について振り返ってみましょう。

「ウソをついてワニ（サメ？）をだましたこと」

「ワニがだまされたけども命を取ることはしなかったこと」

「ウソがばれて赤裸になったこと」

「痛い思いをしながら反省をしたこと」

これらはすべて

「問題が起きた（起こした）」際に

「どう考えて？」

「どうするか？」

というお話になっております。

その解決策は...

「ただ我慢する」

ということではなく

「積極的」にその「問題」を「受け入れる」

という姿勢からスタートしております。

日本人は世界の中においても

この「問題を受け入れて」そこから解決する

という能力に非常に長けた民族です。

それは...

毎年「台風」は来るし

しょっちゅう「地震」が起きる

そういう

「逃れたくても逃れられない」

そんな「自然災害」とともに

2000年以上も暮らしてきた民族だからなのです。

その「自然災害」の間は

ただじっと「我慢」かもしれませんが

その災害後の

「荒れ果てた状態」

を積極的に受け入れて

また元通りにすることをいとわない

そんな民族なんです。

2000年以上も！
です。

だからその

「問題解決能力」

である

『やまところ』

は日本人だったら誰にでも

そのDNAが根付いているんです。

どなたにでも発揮できる力

なのです。

だからこそ

この日本で一番古い歴史書である

『古事記（こじき）』

がそのDNAを呼び覚ますきっかけになると

そう考えているんです。

まとめ

いかがでしたか？

「『やまところ』...そうなんだあ...」

という感想がほとんどでしょうかね(笑)？

詳しい説明は省きますが...

第二次大戦後の教育政策により

こういう

『やまところ』

を子どもの頃から学ぶ

...という機会が失われてしまいました。

私だけではないと思いますが

そういう

「日本ならではの」考え方は

今後に残していきたいと

そう強く思っております。

何度もお伝えしてきましたが

『古事記』は日本で一番古い歴史書です。

これをじっくり読むことで

現代でも役に立つ

これからの「新しい生き方」が学べるはず

...と私は信じています！

もうすでに！

皆さまの心の中に

『やまところ』がうっすらと表れているのではないかと

私はそう信じております！

5回に渡り

ともに学んで頂けたことを心より嬉しく思います。

この学びが皆さまの今後の人生にお役に立つことを願って

最終の講義を終了させて頂きます。

最後まで本当にありがとうございました。

おわりに

最後までお読みくださりましてありがとうございます。

この度のこちらの電子書籍は
「マナビート赤熱教室」として
私が社会人の皆さまに行っている研修の一部を
私のメルマガを登録して頂いた方への特典として
5回の「メールセミナー」
として配信している内容をまとめさせて頂いたものになります。

私は「古典」が好きなのですが
「四書五経」ってご存じでしょうか？

その「四書」とは
「論語」「孟子」「大学」「中庸」
この4冊の古典を指しまして
どれも
「生き方の指南書」
になります。

江戸時代にありました「寺子屋」では
子どもたちがこの「四書」を勉強していました。

「読み書きそろばん」
といわれていましたが
その「読み」とは「四書」を読むことなんですね。

その「四書」は中国のものになりまして
とてもいいことが書かれているのですが
日本にも古くからあり
「心をみがいて」くれて
「心をまっすぐ」にしてくれて
「心の軸」を育ててくれる
そんな書物が
『古事記』
ではないかと思います。

日本人は...

「仏教徒」が多いですが

「クリスマス」も祝いますし

お正月には「神社」にも行きますし

最近では「ハロウィン」のパーティーでも楽しめます。

どんなものでもまずは

「受け入れられる」

という心を持っています。

「八百万（やおよろず）の神」

という考え方がきっと日本人独特なのでしょうが

日本人は自然にあるものすべてに

「神が宿る」

と考えています。

少なくとも昔の日本人はそう考えていました。

その記録が

「スサノオノミコト」であり

「アマテラスオオミカミ」であり

「オオクニヌシノミコト」といった神々の物語なんですね。

時代が変わると

変化してしまうものもありますが

変わらないものだってあるはずです。

私たちの遺伝子DNAには

きっとその「やまところ」が宿っているはずです。

『古事記』は...

「まっすぐ」をキープしながら進むのが難しい現代において

その「まっすぐ」に生きる

「日本人とはこうあるべき」

「日本人はこう生きるべき」

という

その方法を教えてくれる

「生き方の指南書」

になると私は信じています。

こちらの電子書籍の内容が

皆さまのこれからの

「生き方の指針」

に少しでもお役に立てるのでしたら

これ以上の幸せはありません。

最後までお読みくださいませ本当に

本当にありがとうございます。

筆者プロフィール

中村 雄介（なかむら ゆうすけ）

株式会社マナビート

<http://www.manabeat.jp/>

代表取締役 兼 人事総務コンサルタント

昭和48年9月3日生まれ

長崎県長崎市出身

長崎大学経済学部卒

大学卒業後に福岡にて金融業界に勤めるも肌が合わず退職。

心機一転、「教育業界」を目指して

小中学生を対象とした個別塾業界に転職。

二教室を担当する指導者兼教室運営責任者、

生徒募集を専門とした企画開発部員を経て

幼児から小学生を対象としたスポーツスクール運営企業の創業メンバーとして独立。

まったくゼロから管理部門を立ち上げ、

スクール運営を裏から支える「後方支援」に特化した管理システムを構築する。

トップマネジメントの一員として

福岡にて社員数10名からスタートし全国17拠点・海外2拠点

会員数3万名・社員数400名規模までの成長を支える活動を行う。

創業10年を区切りとして2011年に独立。

企業と医療機関のための管理部門の専門家（エキスパート）

株式会社マナビートの代表取締役兼人事総務コンサルタントとして

管理部門（主に人事総務部門）に特化して

「面接」のやり方や「いい人財」を見分ける方法のアドバイスを専門に行い

企業と医療機関の管理部門スタッフの成長に貢献。

致知出版社公認「応援ブロガー」22名のひとり

致知出版社で現在唯一の「致知仲間」認定

パワー&エレガンス魅力学講座修了生

魅力学エグゼクティブ講座修了生

感動魅力学受講生

インターナショナル魅力学協会員